

熊本城ホール VR入場

崇城大生らソフト開発

崇城大工学部（熊本市西区）の古賀元也助教（39）の研究室が、今年12月に開業する「熊本城ホール」への入場を一早く体験できる仮想現実（VR）ソフトを開発した。市は「視覚的に捉えることができ、わかりやすい」とし、イベントの誘致などに活用したい考えだ。

（那須大暉）



熊本市役所本庁舎1階に設置されたパソコンで、VRを楽しむ網田さん（左）ら

時間や壁、細部までこだわり

「へえ、こんな感じなんだ。完成が楽しみ」。市役所本庁舎1階に期間限定で設けられた体験ブースで、市内の会社員女性（38）が興味深そうにパソコンの画面を見つめた。研究室に所属する大学院生・網田隆晟さん（23）は「データ量が膨大で苦労したが、作って良かった」と笑顔を見せた。

VRでは、各階ごとに画面を切り替えて座席の間を通り抜けたり、階段を上ったりするなど自由にホール内を探索できる。周辺の町並みも再現し、窓越しに熊本城が見えるほか、時間の経過を表現し、建物内に差し込む太陽光や影の長さも変化する。

市から2015年度に委託を受け、教員や学生ら約10人で制作した。制作費は約325万円で、設計図や断面図を基にコンピュータグラフィック（CG）作成ソフトで立体化した。図

面から読み取れない壁の素材や色は、市の担当者に確認するなどし、細部にまでこだわった。

昨年12月の開業1年前イベントで初めて披露し、子どもや外国人にも好評だったという。古賀助教は「未来の町並みをゲーム感覚で楽しめる。市民が町づくりに参加するきっかけになれば、うれしい」と語る。今後、市は、イベントなどで市民に体験してもらおう。熊本城ホールは、延べ床

面積約3万8000平方メートルで、約2300人を収容できるメインホールを備える。20年10月には48か国の政府首脳が集まる「アジア・太平洋水サミット」の開催が決まっている。

市新ホールマネジメント課は「イベントの主催者に画面を見せて説明するよりも、ソフトを使って立体的に把握してもらった方が誘致には効果的だ。積極的に活用したい」としている。